

氏名	古屋 肇子
学位の種類	博士（応用情報科学）
学位記番号	博情第 59 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）
論文題目	病棟勤務女性看護師への調査データに基づくストレス状況に関する研究
論文審査委員	（主査）教授 石垣 恭子 （副査）教授 西村 治彦 （副査）准教授 高見 美樹

## 学位論文の要旨

看護師の仕事は、病気を持つ人々を24時間ケアする対人援助職であり、身体的にも精神的にもストレスが多い職種である。ストレスによる離職は、人手不足を常態化させ、看護師の疲弊が続くと、利用者の安全や必要なケアの確保が困難となる悪循環が生まれる。女性看護師がメンタルヘルスを保ち、長く働ける労働環境を維持することは、患者へのケアの質の維持・向上につながるものと考えられる。

本研究は、病棟勤務女性看護師は夜勤による長時間勤務や超過勤務が多く、仕事もプライベートもどちらも充実させる働き方・生き方であるワークライフ・バランスを保つことが難しいことが推測されるため、職業性ストレス評価について、個人のストレス評価だけでなく今後の職場改善やストレス予防に向けての取り組みとして、職業性ストレス簡易調査票（Brief Job Stress Questionnaire：BJSQ）とともに配偶者と子どもの有無に着目した家族構成、およびストレスに関連があると考えられる回避型対処行動について調査内容を拡張し、病棟勤務女性看護師のストレスの総合評価について検討を行った。

第 1 章では、女性看護師の職場環境とストレスの現状、BJSQ の概要、本研究の目的および本研究の構成を述べた。

第 2 章では、ストレスモデル、職業性ストレス、本研究で使用した職業性ストレス尺度である BJSQ、女性看護師を取り巻く状況および職業性ストレスに関する先行研究について述べた。

第 3 章において、病棟勤務女性看護師への調査データと基本集計結果について述べた。全国の 400 床以上の総合病院の 13 病院（47 病棟）の看護師 990 名を対象に質問紙調査を実施し、対象は、仕事とともに家事や育児など負荷の多い就労女性のメンタルヘルスを検討する目的のため女性のみとした。BJSQ57 項目と回避型対処行動 5 項目、年齢、学歴、看護歴、所属の病棟科、勤務体制（2 交替、3 交替、日勤のみ）、配偶者の有無、子どもの有無について実施した。

第 4 章では、ストレスサー、ストレス反応、サポートおよび満足度の各高低群に基づく 2 群比較を行った。その結果、ストレス原因が高い人はストレス反応が高く、サポートが低かった。逆に、ストレス原因が低い人はストレス反応が低く、サポートが高いことが矛盾なく確認された。因子レベルでは、心理的に感じる仕事の負担（量・質）や自覚的な身体的負担度など、仕事の負荷に関する項目では、他の因子より平均値が高く、同僚や上司のサポートがあったとしても、容易に実際の仕事量を軽減できるものではないという特徴

が見られた。満足度高低群比較では、ストレッサー、ストレス反応、サポートの各因子と満足度との関連は大きいことが推測される。一方、年齢高低群比較では、低値群は仕事の知識や技能が低く、「仕事のコントロール」ができにくいため、サポートが必要であることが示唆された。

次に第5章では、家族構成別に、[配偶者なし・子どもなし]、[配偶者なし・子どもあり]、[配偶者あり・子どもなし]、[配偶者あり・子どもあり]の4群間で、ストレッサー、ストレス反応、サポートの各項目得点の平均値について比較を行った。その結果、経験の浅い若年の看護師は仕事のコントロールに問題があり、自分のペースで業務を行えていない可能性が高く、シングルマザーの看護師には、身体愁訴を低減させるサポート体制を充実する必要性があることが推測された。

第6章では、回避型対処行動5項目の信頼性・妥当性の検討と回避型対処行動の高低群に基づくBJSQの各尺度の2群比較を行った。その結果、ストレス対処行動の信頼性・妥当性を確認することができた。高低群比較では、回避型対処行動が高いと、ストレス反応を高めサポートを受けにくくなると推測されるため、回避型対処行動はストレスの指標の一つとなりうる可能性があると考えられた。回避型対処行動を多用している女性看護師には、「抑うつ感」などの高いストレス反応状態である可能性があるため、そのことを自ら認識しサポートを求めたり、周囲がサポートをする必要があると考えられる。

さらに第7章では、病棟勤務女性看護師のストレス評価の因果関係を総合的に見るために、共分散構造分析による分析を行った。その結果、BJSQに回避型対処行動の変数を設定したモデルが従来のMIMICモデルより高い適合度を示した。「職場のサポート」から「ストレス反応」の間に「職場のストレッサー」が介在し、「回避型対処行動」が、心理的ストレス反応である「イライラ感」「疲労感」「不安感」「抑うつ感」と身体的ストレス反応である「身体愁訴」とともに、ストレッサーからの一つの行動的ストレス反応という位置付けとなった。

最後に第8章では、まとめおよび今後の課題について述べた。本研究では、BJSQ、家族構成とともに回避型対処行動を用いて病棟勤務女性看護師のストレスを俯瞰し、総合的に分析した。この研究のアプローチは、BJSQ調査データへの有用な分析法の1つとして発展させていくことが可能であることが示唆された。今後、構築された病棟勤務女性看護師のストレスモデルを現場にフィードバックし更なる改良を行うことで、職場環境の改善やストレス予防につながっていくことが期待される。

## 論文審査の結果の要旨

病棟勤務女性看護師は、夜勤による長時間勤務や超過勤務が多く、仕事もプライベートもどちらも充実させる働き方・生き方であるワークライフ・バランスの保持が難しいことが推測される。

そのため本研究では、看護師の職業性ストレス評価について、個人のストレス評価だけでなく今後の職場改善やストレス予防に向けた取り組みとして、職業性ストレス簡易調査票(Brief Job Stress Questionnaire: BJSQ)とともに配偶者と子どもの有無に着目した家族構成、およびストレスに関連があると考えられる回避型対処行動について調査内容を拡張し、病棟勤務女性看護師のストレスの総合評価について検討を行った。全国の400床以上の総合病院の13病院(47病棟)の看護師990名を対象に質問紙調査を実施し、対象は、仕事とともに家事や育児など負荷の多い就労女性

のメンタルヘルスを検討する目的のため女性のみとした。BJSQ57 項目と回避型対処行動 5 項目、年齢、学歴、看護歴、所属の病棟科、勤務体制、配偶者の有無、子どもの有無について実施した。

その結果、因子レベルでは、心理的に感じる仕事の負担(量・質)や自覚的な身体的負担度などの仕事の負荷に関する項目では、他の因子より平均値が高く、同僚や上司のサポートがあったとしても、容易に実際の仕事量を軽減できるものではないという特徴が見られた。経験の浅い若年の看護師は、仕事のコントロールに問題があり、自分のペースで業務を行えていない可能性が高く、シングルマザーの看護師には、身体愁訴を低減させるサポート体制を充実する必要があることが推測された。また、回避型対処行動 5 項目の信頼性・妥当性の検討と回避型対処行動の高低群に基づく BJSQ の各尺度の 2 群比較を行った結果、ストレス対処行動の信頼性・妥当性を確認することができた。回避型対処行動が高いと、ストレス反応を高め、サポートを受けにくくなると推測されるため、回避型対処行動はストレスの指標の一つとなりうる可能性があると考えられた。回避型対処行動を多用している女性看護師には、そのことを自ら認識しサポートを求めたり、周囲がサポートをする必要があると考えられた。さらに、病棟勤務女性看護師のストレス評価の因果関係を総合的に見るために、共分散構造分析による分析を行った結果、BJSQ に回避型対処行動の変数を設定したモデルが従来の MIMIC モデルより高い適合度を示した。「職場のサポート」から「ストレス反応」の間に「職場のストレス」が介在し、回避型対処行動が、心理的ストレス反応である「イライラ感」「疲労感」「不安感」「抑うつ感」と身体的ストレス反応である「身体愁訴」とともに、ストレスからの一つの行動的ストレス反応という位置付けとなった。

本研究では、BJSQ、家族構成とともに回避型対処行動を用いて病棟勤務女性看護師のストレスを俯瞰し、総合的に分析した。この研究のアプローチは、BJSQ 調査データの分析法の 1 つとして有用であることが示唆された。今後、構築された病棟勤務女性看護師のストレスモデルを活用することで、職場環境の改善やストレス予防につながっていくことが期待される。

これらの研究成果を総合した結果、本審査委員会では、本論文が「博士(応用情報科学)」の学位授与に値する論文であると全員一致で判定した。